## 東洋文化史研究

内藤湖南著

弘文堂發行。菊版三八三頁、定價參圓。

この書の一般的價値に就いては一月餘り前に姫路高校教授丹羽正義氏が大毎紙上に於て詳しく紹介されたし、又羽田先生の序文(本誌前號弘文堂廣告所掲)に於ても十分述べられてゐるから、こゝでは書中に收められて居る諸篇に就いて紙數の許す範圍で一々紹介し、それに多少の感想を附け加へることゝし度い。

初めの二篇、「支那上古の社會狀態」「殷墟に就て」は題の示す如く古代史の領域に屬するが、兩篇共殷墟の出土品を中心としたもので、どちらかと言へば著者の古代史研究の中で比較的重要でない部分である。蓋し古代史に於ける著者の最も得意とする所は、古代傳說の取扱ひ方、並びに古典のテキスト・クリティークの方法にあつたと思はれる。但しこれは著者が古代史の資料として出土品や金石文、甲骨文の研究をそれ程重視して居なかつたといふ意味ではない。寧ろその反對なのだが、唯この種の研究はその性質上からしても新しい資料の出現と共にその度毎に是正さるべきものであり、事實最近續々發掘が行はれる結果支那に於けるこの方面の研究は著しく進歩してゐる。この二篇は、併し乍ら、今日に於ても尙上古史の良きイントロダクションたるを失はないであらう。

「染織に關する文獻の研究」「北派の書論」「紙の話」「宋元版の話」の四篇はこの書中で、讀んで最も面白くない話である。といふのはこれ等は皆人が實物を相當觀て、多少でもその對象に興味を持つた上で初めて面白く讀み得る性質の話だからである。元來著者は支那の歷史を理解するにはどうしても支那人の趣味、藝術から理解してかゝらなければ嘘だと考へて、早くから支那のあらゆる文物に關心を持ち始めたらしいが、幸にして東北の片田舍の田舍者としては異常なる感受性を持つて居た爲に文學、美術、工藝などに於ては相當深い所迄理解するに至

つたものである。著者の歴史家としての強味は一つは實にこの點にあるのであつて、後に述べる文化觀の如きも專らこの邊に端を發して居るわけである。この四篇はいはゞ著者の支那文物禮讃の副產物ともいふべきものであらうが、その研究法などに於て特に取り立てゝいふ程のこともない樣である。著者が最もその理解を誇つた書及び畫の中、畫に關するものがこゝに收められて居ないのは、繪畫に關するものだけを別に集めて單行本にしやうといふ編者の意圖より出て居る。

「支那の通貨としての銀」。著者の經濟史に對する關心は今日世を擧げて喧しく言はれて居る風なものではない樣である。つまり一般の歷史に必要なだけの關心であつて、特に經濟史の重要性を云々するのを聞いたことが無い。尤もその前身が新聞の論說記者であつたゞけに政治經濟に對する著者の見識は無論常識の域を脫して居る。この篇に於いても單に通貨としての銀を論ずるのみでなく、一般に支那の幣制と國家の興亡（特に宋以後の）との關係に常に注意しながら話が進められて居るので讀者は殆ど倦むことなしに讀み終ることが出來る。

「概括的唐宋時代觀」と「近代支那の文化生活」の二篇は大體同じ內容であるといつてよからう。この二篇及び之に續く「民族の文化と文明とに就いて」「支那人の觀たる支那將來觀と其の批評」「支那に還れ」の三篇は著者の支那觀及び文化觀といつたものを知るのには實に絕好の論文である。こゝでは著者は殆ど學問といふ形式に拘束されることなしに思ふ存分に自分の考へを述べて居り、且著者の多方面に亘る蘊蓄も眞に小氣味よく驅使され、傾け盡されて居る。中でも「近代支那の文化生活」は壓卷の名篇だと私は思つてゐる。著者の所謂中世と近世（唐以前と五代以後）との社會相の差異を質的にかくも明確に描き出し得たのは、たしかに著者の功績であらうと思ふ。（著者の文化觀に關しては大正十三年に發行された「新支那論」といふ小著以外では餘り詳しく發表された事が無いから、この際簡單に紹介して見たい。）この篇に於いて著者はまづ近代の特徵として平民の發展、政治の重要性減衰といふ二つの事柄をあらゆる方面から詳しく說明して、中世との對立に於ける近世の概念を明かにした後、支那近代の文化生活の內容として次の樣なことを擧げて居る。その一つは大衆生活の向上したこと、之であつて、その結果天分のある者、天子の如き特殊な地位に

ある者等凡て特殊性のあるものが壓迫されるといふ樣なことが起つて來る。その二は著者は平民時代といふもの・は大體民族生活の衰退期に近いことを意味するとし、一方では趣味、藝術に於いて人工的なるものから原始的な古代に復らうとしたり、夷狄の趣味を取り入れたり、古器物を愛玩したり、凡て人間でいへば淡白を愛する老人の如くなつて來たこと等である。「民族の文化と文明に就て」に於いては、政治經濟等を含んだ廣義の文化は寧ろ文明といふべきであつて、國家の富强、經濟組織、工業の進歩、國民生活の向上などのほかの、思想、道德、學藝、趣味等の文化的敎養が純粹の「文化」であると考へ、更に文化の中でも哲學、科學等は民族の發展の初期に於ても發達し得るが、趣味藝術に至つては古い歷史を持つ民族にして甫めて、之を享樂し得る所であるとし、この點に於て東洋では支那印度を、西洋ではフランス・イタリーを禮讃して居る。この一文は著者が渡歐の歸朝後間もなくものした所のものである。

著者の支那觀は前に言つた「新支那論」及び「支那論」にも述べられて居るが、こゝでは私が特に面白いと思つた次の一事を擧げるに止めやうと思ふ。それは近代の支那の有樣が必ずしもすべて支那人の國民性であると片づけられるわけにはゆかないといふことで、之に就ては私が下手な紹介をするよりも「支那人の觀たる支那の將來觀と其の批評」の一節を引いた方が手取り早い。「何れの國でも、其の國民性を觀察するには、餘程困難なる事情が絡み來るものであつて、時代から來れる特別なる現象を、國民性から來れる所の現象と混同して考へることが多く、例へば、玆に十五六歲の少年と三十代の壯年と六十歲を越した老人とがあるとする。そして、十五六の少年は遊戲を好み、三十代の壯年は勝負を好み、老人は骨董とか藝術とかを好む場合、直に其の各目を特別な個性と觀察するときは屢々誤謬を生ずる。個性は年齡によつて時々其の好みが變るので、今日の老年は昔の少年時代には今の少年と同じことを好んだかも知れず、今日の少年は老人に達すると今日の老年の如く趣味が變つて來るかも知れない。」「眞の國民性と云ふものは時代の特別現象を控除したものであらねばならぬ」云々。

終りの「東北亞細亞諸國の感生帝說」「女眞種族の同源傳說」「日本滿洲交通略說」「古の滿洲と今の滿洲」「昔の滿洲研究」の諸篇は滿洲史の領域に屬する作品である。

初めの二篇に於ては著者の傳說に對する注意の一端を見るに足るが、力作とは言ひ難い。「日本滿洲交通略說」はそれに引きかへて略說とは言ひ乍ら仲々の力作である。滿洲に關する研究は最近我國に於いて日々長足の進歩を遂げつゝある狀態であるから著者の作品は勿論改むべき點も多々あるであらうが—著者自身、既にそのことを認めて居る—はじめて之に携はつたものとしてはよくまとまつてゐると言へるであらう。「昔の滿洲研究」は德川時代以來の日本人の滿洲研究の有樣を述べたものだが、之などは今日でも大いに役に立つものと思はれる。滿洲史のことは私にはよく分らないが、畏友今西君の言を藉りると「動もすれば無味乾燥になり勝ちな滿洲史の話を、この三篇程面白く人に讀ませるものは他にない」とのことである。

著者の學問の專門的な研究は大抵「研幾小錄」「讀史叢錄」の二著の中に收められて居り、こゝにはそれ以外の論文、講演速記等を集められて居る關係上、概して調子の低いものが多い點は否むことが出來ないが、その代り普通の讀物としては仲々面白いといふ長所をこの書物は持つて居る。人はこの書物を讀むと常識的興味が如何にして學問的研究に導かれるかといふ道筋を目のあたりに見せられる樣な氣がするだらうと思ふ。羽田先生の序文にもある通り、——著者が生前よく使つた言葉を借りると——この藝當はたしかに著者の特色の一つとして數へることが出來やう。

政治經濟の再認識が歷史學に於ても强調されて居る今日、著者の——少くとも此書物に表はれて居る——如き文化觀は、立場として全面的に現代の青年の心にアツピールするだらうとは私には思はれない。此書物に表はれた以外の著者の色々な考へを知つて居る私自身としても著者の文化觀の立場には若干の異論を挾みたい氣持を持つて居る。著者は別に現代の日本人——民族として未だ青年期にある日本人が取るべき態度に就ても一見識持つて居た事を私は知つて居る。併しそれと此著に謂ふ如き老成せる文化を謳歌する態度とを如何に調和すべきかに關して著者は今一息親切でなかつたと言へるし、更にかゝる綜合的反省に於て徹底を缺いて居たと言はれても仕方がないのではなからうか。著者の歷史觀に就ては遺稿「史學史」が他日出版された時にする方がより適切だらうと思ふから、その折に讓りたい。（內藤戊申）